

はじめに

人類がいつこの地球上に誕生したのか、現在まだはっきりしたことは言えないようです。どこで誕生したかについては、アフリカ大陸東岸部のタンザニアから、ケニア、そしてエチオピアを貫通して、紅海沿岸に至る大地溝帯とされていますが、これも確定しているわけではありません。発掘される化石の年代はどんどん過去にさかのぼっていくようです。何をもって人類と見なすかについて見解の一致がみられないというのが実情ですので、過去にさかのぼっての人類の祖先探求は、果てしがないともいえるでしょう。生物進化のいつかの時点で、人類の祖先とチンパンジーが別々の道を歩み出したということがあったとしても。チンパンジーと人類を分かつものは何なののでしょうか？何をもって人類と見なすか、人類の定義が問題となってくるでしょう。

人類がいつ言語を獲得したのか、これについても現在確定的なことは言えないようです。ネアンデルタール人は、すでに言語を獲得していたのか。現世人類であるクロマニヨン人は、わたしたちの言語につながる初期の言語を話していたのか？大まかなことをいえば、約 10 万年ほど前に、人類は言語を獲得したとされていますが、それにはどのような証拠があるのでしょうか？人間言語すなわち意思伝達手段としての言語、コミュニケーション手段としての言語という捉え方をされますが、人間言語は、他の生物たちが行っている情報伝達活動の手段とどのような点で似ており、異なっているのでしょうか？ミツバチは蜜がある場所を、ダンスをしているかのような動きで仲間の働き蜂に伝えています。そして、猿たちは、その鳴き声というか叫び声で情報を伝え合っています。そういったいわゆる比喩的に言われるミツバチの言語や類人猿の言語と、人間言語は、どう本質的に異なっているのでしょうか？そもそも言語とは何か。言語というものの定義が問題となつてこざるをえないでしょう。

現在地球上には、5 千とも 6 千ともいわれる数の言語があるといわれています。中国語や英語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、日本語といったように多くの人々の母語として習得され、話されている言語があります。他方、話し手がきわめて少数の、中には指で数えることができるほどの話者しかいない言語も存在しています。数多くの言語が過去に存在していましたが、現在では死滅してしまっているという言語も多くあります。歴史の中にしか登場してこない言語も存在します。そもそも現存する言語の数と、かつて地球上に存在し、現在では死滅してしまつた言語の数、どちらが多いか少ないか。誰も確定的なことは言えません。

そもそも、それだけの数の言語が、もし人類の祖先がアフリカで言語を獲得したとして、その一つの言語から、どのような過程を経て、何千という数にまで分化していったのでしょうか？言語の地球規模的な歴史的展開については、果てしないロマンがあるといえます。そして言語の歴史的展開に関する仮説も数多いのですが、いずれの仮説がまっとうなものであるか、決め手はありません。しかし、人類がその進化の過程のどこかでことばを獲得したということは、動かし難い事実です。

人類が言語を獲得したのは、あるいは、せざるを得なかったのは、どのような理由からでしょうか？生き延びるために、というのが進化論の教える所です。言語を獲得することが、どのような利点をもたらしたのでしょうか？言語発生の動機についても、幾多の仮説が提出されてきています。従来優勢であったのは、情報伝達のため言語が誕生した

というコミュニケーション説です。近年は、コミュニケーション説とともに、情報伝達よりも、グループ成員間の連帯意識を涵養、維持、強化するためにこそ言語は必要とされ、誕生したというグルーミング説（毛づくろい説）が信憑性を獲得しつつあります。言語の機能は、例えば、個体の内面、感情の表出、そして相手の行動を促す訴え、この世界の有り様を叙述するという3つであるとするならば、いずれの機能が先か、言語の誕生において一番重要なものはどれであったか、という議論になっているとも言えます。

人類が群れを形成して、自然災害、外敵と向き合ってきたということも歴史的事実でしょう。共同体の形成と、言語の発生は、平行していたという考えが一つの有力な仮説としてあります。コミュニケーション説、グルーミング説、あるいはルソーが唱えた感情表明としての言語という説（情念説）のいずれも、共同体の成員としての個々の人間の存在を前提としていると考えることができます。

コミュニケーション、グルーミング説、情念説のいずれであれ、ことばの送り手と受け手の存在を前提としています。ことばは、送り手と受け手をつなぐ媒体として機能しているのです。ことばは、送り手と受け手がともに存在している世界についての情報を伝え、互いの絆を強め、互いの内面世界を理解する手段として機能しているのです。共に生きているこの世界について、同じ了解を取り付けるための手段として機能しているのです。理想的には、個々の成員が同じ世界像を所持することが目指されていると考えられます。そうしてこそ、自然災害、外敵に、一致して向き合っ、生き延びていくことが可能となるといえるでしょう。

同じ言語共同体に属する個々の人間は、同じ世界像を共有するべく、世界における事物、対象にことばを与え、秩序を作り出しているのです。ことばによって、世界における定位、方向付けを行っています。混沌の中に、ことばによって、一定の秩序を作り出していくというのが、命名という行為です。そのことを神話的、象徴的に述べているのが、旧約聖書創世記の一節です。すなわち、神は、アダムに、すべての事物に名を与え、支配するよう、命じたのです。事物に命名することが、その事物を支配することなのです。同じ考えは、日本の神話的な歴史記述である『古事記』にも見られます。

言語は、人間の歴史とともに展開してきました。そして人間の歴史、文化の展開とともに変化してきました。そして、今なお変化していますし、将来的にも変化していくでしょう。人類そのものが未だ進化の途上にあるのであれば、そして人間社会、文化が変化していくのであれば、言語が変化していくのは、必然でしょう。言語にはそのような人間の文化、歴史の展開が積み重なっているとも言えます。とりわけ、命名の動機ともなっている比喩は、現在の私達から見ると、もはや時代遅れとも言えるものも多いことが、言語がそのような幾層もの積み重ねから成り立っているということを物語っていると言えるでしょう。例えば、私たちは自然科学の知識によって、太陽は昇るのではなく、気球が自転しているため、そのように見えるだけだということを知っています。しかし、言葉の上では、依然として、「日の出」「日の入り」という天動説に基づいた表現を使っています。

世界が変化することによって、事物もさまざまに変化します。そして、それらの事物を命名する必要が常に生じてきます。命名の動機は、さまざまであり、一様ではありません。命名の動機、観点は、基本的には、その事物の機能に基づくものと、形態に基づくものがあります。そして、新しいことばを作り出すのでなければ、既存の言語手段を転用するか、組み合わせる新しい事物の名前とするのが、ふつうです。あるいは他の言語から表現を借りてくることとなります。いわゆる借用語です。

事物が有している諸特性とその事物に与えられた名前（表現）の間に必然的な関係はない、というのがソシュール以来の言語学が教える所です。単一語とその単一語が指示し、名指し、表しているものとの間については、確かに必然的な関係はないといえます。日本

語で「犬」といい、ドイツ語で「Hund」、英語で「dog」、イタリア語で「cane」と呼ぼうが、それぞれの名前が名指している生物学的存在は、同じものなのです。

複合語については、しかし、それぞれの言語においてある種の必然的な動機付けがあるといえます。何がそのような複合的な命名を動機づけているのか、その動機付けには、それぞれの言語に特徴的なものがあるといえます。そしてそのような動機付け、そしてその背後にある比喩的思考を比較対照することによって、それぞれの言語文化の特徴が見えてきます。本講座が「虹の彼方に見ようとする言語文化論」とは、そのような命名の動機付けを通して見た言語文化の相異についての論です。本ゼミナールは、言語による事物のイメージの違いを明らかにする試みでもあると言えます¹⁾。

以下、諸言語における事物の認識の枠組みの違いについて考えるために、単一語、複合語、句、文、文章の5つのレベルに分けて、単一語と複合語については命名を動機づけている比喩、そして、句、文、文章についてはその背後にある比喩的イメージを見ていくことにします。

本論：命名の動機付けと比喩的イメージに関する考察

単一語(Simplex)

「クマ」は、どうして「クマ」というのか。黒い馬のようだから「クマ」というのか。「くらがりに住むところから、クマ(隅)の義か<和句解>」(Meda 2005: 434)。「ネコ」は、寝てばかりいる子供だから、「ネコ」なのか。あるいは「ネは鳴き声」に由来し、本来的には擬音的な命名なのか。そのような、いわゆる民間語源的な説明は、面白いとは言えますが、言語学的には信憑性に欠けます。また、学問的な語源考証も、決定的はいえない場合が多いようです。犬や牛、あるいは山羊などについては、その鳴き声の名前となったのだという自然音源説といったものも言語の起源について提唱されました。「わんわん説」「もうもう説」「めーめー説」といったものです。そういった動物の日本語における名前に限って言えば、子供の言語獲得の過程においても同様のことが観察されることが、そのような説に至る論拠であったとも言えますが、事物の形態が命名の動機となっていることを物語っています。他方、机は、その形態が重要というよりは、機能が決め手となっていることも確かです。林檎箱でも、机として利用することができるし、食卓ともなり得ます。

日本語では「本」といっていますが、そもそもはものごとを書き記したものが木や竹であったので、それを数えるときに「本」といっていたのが、書き記された媒体そのものをさすようになったというのが、日本語の語源辞典が教える所です。これに対して、ドイツ語の「本」は、Buch といいますが、これは、現在のドイツ人の祖先であるゲルマン人が、かつて、ブナの木の本葉や皮をいわばメモ用紙として使っていたことに由来しています。日本語では数えるときの助数詞が、ドイツ語では素材の名前が、後世に発明された「本」の名前となっているのです。単一語の命名の動機を詳しく調べることは、なかなか困難な作業ですが、それを通して、それぞれの言語文化の歴史やそれぞれの命名の背後にある発想というか、考えの違いがわかりやすい形で見えてくるといえます。そういったような知見をもたらすものとして語源に関する比較対照研究の展開が期待されます。

日本語の「家」とドイツ語の"Haus"は、本来的には、どちらも「居住するための建築物」という機能の面から捉えられているといえるでしょう。しかしながら、日本語母語話者が抱いている「家」のイメージと、ドイツ語母語話者が"Haus"について抱いているイメージは、それぞれの言語圏における地域差があることはもちろんですが、大きく異なっているといえます。そもそも日本とドイツでは、その建築様式、建築材料等が異なっています。"Haus" = 「家」という等式は、基本的意味においては当てはまるかもしれませんが、イメ

ージ、コノテーション（ことばの副次的意味においては、当てはまらない場合が多いといえます。

コノテーションという問題について考えるとき、個人的なコノテーション、つまり一人一人の言葉遣い（パロール）における個々の語がもっているコノテーションと、超個人的なコノテーション、例えば日本語の言語体系（ラング）に組み込まれたものとしてのコノテーションを区別する必要があります。わたしたちは言語習得の過程においては、とりあえずはラングにおけるコノテーションを習得しますが、それは、パロールをとおして習得するのです。従って、個々人が個々の語に対して抱いているコノテーションは、ラングとして共通する部分を有しながらも、個々人の体験に基づく特有のコノテーションが付随しているのです。そして、個々人のコノテーションが、いつしかラングに移行し、浸透していくのは、言語変化の一般的パターンとも重なっています。つまり、語のコノテーションも変化するということであり、その変化をランデスクンデ（それぞれの言語文化圏に関する事情学）との連関で追求することも、異言語文化に関する研究の重要な課題であるといえます。

複合語 (Kompositum)

古代の日本人は、虹を「雨の浮き橋」(『古事記』)と呼んでいます。それは神話的な語りという文脈です。日本語の歴史的展開の中で、そのような詩的とも言える表現は、中国由来の「虹」に取って代われ、現在の日本語では、各地の方言も含めて、「虹」一語という状態になっています。もちろん、各地の方言による細かい音声上の違いはあります。たとえば、筆者の第一言語である奄美・徳之島方言では、[ne:gi]といますが、どのような音の変化を経ているかは、容易に理解できるでしょう。中国語の「虹」は、その漢字の成り立ちからいうと、複合的ですが、偏となっている「虫」は、本来は「竜」を意味しているということです。傍の方の「工」は、「水流の大きいさまを表し」ているようです。

「虹」という漢字からは、「虹」が「竜」と関係づけられ、そしてまた「水」とも関連づけられているということがわかります。日本の各地に、「竜」がついた名前の池や、滝、沼がたくさんあることから、そのことは納得がいくのではないのでしょうか。「竜神」は、水の神様でもあるのです。神社の入り口にある手水場には、竜の口から水が流れているのがよく見られます。「竜巻」の名前は、まさに竜をイメージしてつけられたものといえるでしょう。



日本からヨーロッパに目を転じてみるとどうでしょうか？ヨーロッパ各地における方言の語彙を地図上に書き入れた『ヨーロッパ言語地図』(atlas linguarum europae)のVolume I (1983)及びその言語地図についてのコメント (atlas linguarum europae commentaires Volume I(1983))によると、ヨーロッパの諸言語(方言)においては、「虹」の名前は、まず単一語か複合語という点で大きく2つに別れます。ロシア語を代表とするスラブ語では単一語となっています(*doga)。複合語の場合は、命名の動機が明瞭に見て取れますが、まず、事物による命名か、動物による命名かに、分かります。つまり、英語 rainbow やドイツ語 Regenbogen のように「雨の弓」となるか、イタリア北部におけるドイツ語 regenwurm (みみず) やイタリア語 drago (竜) という具合です。そしてさらに、擬人的な命名や、キリスト教、イスラムの影響による命名が見られます。

次に、方言から、いわゆる共通語に例を求めてみましょう。日本語では「首都」といいますが、ドイツ語では Hauptstadt (頭の都)です。英語とイタリア語は、いずれもラテン語の capo (頭)に由来しているのですが、capital および capitale です。ここからわかるの

は、日本語では「首」が換喩的に「頭」をも意味しているということです。

「目玉焼き」は、どうして目玉焼きというのでしょうか？目玉焼きは、卵1個が本来か、2個が本来か、という議論は、言語学的とは言えません。言語学的には、卵を目と見立てた命名であるというようなことになるでしょう。ドイツ語では *Spiegelei* (鏡の卵)、イタリア語では *uovo al tegamino* (小さなフライパンで焼いた卵)、英語では *a fried egg* といいます。日本語では、多くの場合、表現としては単数か複数を区別しないのでよくわかりませんが、これらの外国語の例から考えますと、「目玉焼き」にそれぞれの言語で対応する表現における卵はいずれも単数形ですので、卵は1個だということになります。イタリア語、英語では、料理のしかたによる命名と言うことになりますが、ドイツ語は日本語と同じように比喩的な表現になっています。ドイツ語の場合は、さらに「鏡」が介在して、鏡に映った目であるという捉え方をしていることになります。

日本語の「横断歩道」は、アメリカでは *a crosswalk*、イギリスでは *a zebra crossing* というようです。いずれも「横断」「横切る」という表現が含まれていることから、日本語の「横断歩道」は、そもそもはアメリカ英語 *a crosswalk* の翻訳語であるのかもしれませんが。いずれも、用向きというか、機能が命名の動機となっています。イギリス英語では横断歩道の形状が命名の動機となっていますといえます。ドイツ語では *die Zebrastreifen* なのですが、これは英語と同じく形状が命名の動機となっています。イタリア語では横断歩道の機能をもっと端的に限定的に捉えて *le strisce pedonali* (歩行者が横切る帯) と呼んでいます。

「日の出」は、英語では *sunrise* (太陽が昇ること)、ドイツ語では *Sonnenaufgang* (太陽が昇ること)、イタリア語では *il sorgere del sole/lo spuntare del sole* (太陽が昇ること/太陽の出現) です。英語とドイツ語は、同じ捉え方をしています。これは両言語が同じゲルマン語に属していることに理由があるのでしょう。これに対して、日本語とイタリア語が、同じような発想で捉えているのが興味深いと言えます。『日本書紀』のアマノ岩戸の神話は、天文学的には日蝕現象が背景としてあるといえるのかもしれませんが、太陽が洞窟に姿を隠したり、現れたりするという捉え方をしているわけです。ついでながら、日の出：日の入り、*sunrise:sunset*、*Sonnenaufgang:Sonnenuntergang* は、それぞれ対をなしているのですが、イタリア語では「日の出」のほうは、英語、ドイツ語と同じようですが、「日の入り」にあたるのは *il tramonto* で単一語となっています。*tramonto* は、動詞 *tramontare* と関係があるのですが、この動詞は「消え去る」という意味であり、太陽を擬人的に捉えている日本語と同じといえます。

日本語では、時計の時間を指す部分を「針」と呼んでいます。そして、長針、短針と呼んでいます。ドイツ語では、時間を「示すもの」*Zeiger* です。そして長針は *der große Zeiger*、短針は *der kleine Zeiger* で、「長短」ではなく、「大小」という対立になっています。英語では *the large hand* (大きな手)、*the small hand* (小さな手) です。*large* と *small* の対立となり、「針」そのものは人間の手に譬えています。おそらく、それは、ドイツ語の *Zeiger<zeigen*(指さす、示す) につながる発想と考えることができます。イタリア語では針は、*la lancetta* で、長針は *la lancetta grande*、短針は *la lancetta piccola* となります。ドイツ語と同じように、大小という区別です。*lancetta* は、そもそもは「槍」、もっと正確に言うると「小さな槍」という意味です。日本人が「針」、英語を母語とする人々が「手」と見立てたものを、イタリア人は「槍」とみているのです。これに対して、ドイツ人は極めて客観的に時間を「示すもの」とよんでいるのです。つまり、形状を命名の動機としているか、機能を命名の動機としているかの違いが見て取れます。

日本では夏を象徴するとも言える「入道雲」は、ドイツ語では *Quellwolken* (泉の雲)、英語では *a thunderhead* (雷の頭) あるいは *a towering cloud in summer* (夏に見られる塔の

ような雲)、イタリア語では cumulo (積乱雲) と呼んでいるようです。英語の a thunderhead、イタリア語の cumulo は、自然科学的 (気象学的) な命名といえます。そして、英語の a towering cloud in summer、日本語の入道雲は、巨大さあるいは坊主頭に着目した命名となっていると考えられます。ドイツ語の Quellwolken は、本来的には入道雲の発生しかたに着目しており、その意味では自然科学的といえますが、命名そのものは他の分野からの語を採用して、比喩的なものとなっています。噴き出してくる水が泉の底の砂を吹き上げているようすが、雲の発生しかたと似ていると言うことでしょう。

最近ではほとんど見かけなくなりましたが、「蝦蟇口 (がまぐち)」という言葉そのものは存在しています。口金の部分を含めて、開けた状態が蝦蟇が口を大きく開けていると見立てているのです。ドイツ語には、フランス語からの意訳 "Geldbeutel" (金を入れる袋: 巾着)、フランス語そのものの借用である "Portemonnai" (お金を運ぶもの)、そして "Geldtasche" (お金のポケット: 財布) の 3 語が並存しています。ドイツ語の命名はズバリそのもの、即物的であり、日本語の命名は婉曲的であり、金銭そのものに直接言及することを避けているかのようです。「蝶番 (ちょうつがい)」と "Scharnier" の間にも同じような捉え方の差異を見て取ることができます。日本語は婉曲的というよりも詩的な表現といべき命名になっています。ドイツ語は語源からいうならば、ラテン語の "cardo" に由来し "Türangel" (ドアを引っかけもの) という、これもまさにその機能をとらえた命名となっています。

たとえば人気歌手を取り巻いて人々が群れをなしている状態は、日本でもドイツでも見られる現象です。日本語では「黒山の人だかり」という表現がそのような事態について使われます。これに対してドイツ語では "Menschentrauben" (人々のぶどうの房) といいます。そこには、人種、文化の違いが反映していると考えられます。言語化の過程において、当該の言語共同体の共同の知識、共同の体験といったものが、重要な役割を果たしているといえるでしょう。

日本語では、非常に短い時間で、いい加減な洗い方をしてふろや行水をすませることを「烏の行水」といいますが、ドイツ語では Katzenwäsche (猫の洗い) といいます。日本語には「猫が手水を使うよう」というドイツ語にほぼ対応した言い回しもありますが、Katzenwäsche というドイツ語から日本語を母語とするものが連想するのは、より一般的には「猫が顔を洗うと雨」という表現ではないでしょうか。

日本語では「魚の目」といいますが、ドイツ語では Hühnerauge (鶏の目) といいます。そして、イタリア語では, occhio di pernice (山うずらの目) です。いずれの言語でも目ですが、動物が違います。ついながら、英語では "corn" というようすが、これは、麦粒のように硬くなった皮膚の箇所というような捉え方をしているといえます。

最後に、下ネタになって恐縮ですが、日本語の便座はドイツ語では Klobrille (便所の眼鏡) と言います。英語では a toilet seat (便所のシート)、イタリア語では sedile del gabinetto (便所の椅子) といいます。ここでも、機能的な命名か、形状に焦点を合わせた比喩的な命名かという対立があります。

句(Phrase)

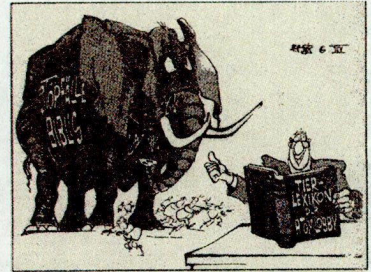
日本でいう「狸寝入り」は、英語では "fox sleep" (狐寝入り) というようすが、ドイツ語で "schlafen wie ein Dachs" (狸のように寝る) といえ、ぐっすり寝込んでいることを意味していて、日本語の「狸寝入り」と同じ意味ではありません。

諸言語における比喩的な捉え方、イメージを句レベルで比較検討する一番最適の手がかりは、慣用句 (イディオム表現) であるといえます。これについては、ドイツ語と日本語のイディオム表現を中心に見ていくことにしたいと思います。イメージの違いが一番よく

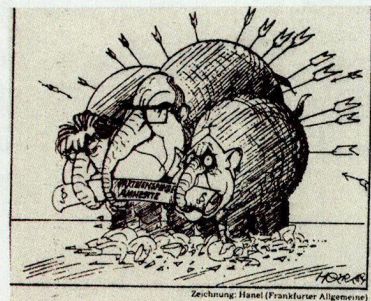
見て取れるのは、動物に関してであると考えます。

ドイツ語には"sich wie ein Elefant im Porzellanladen benehmen" (陶器店における象のように振る舞う)、"ein Gedächtnis wie ein indischer Elefant haben" (インド象のような記憶力を持つ)、"aus einer Mücke einen Elefanten machen" (蚊から象をつくる)、"nachtragend wie ein indischer Elefant sein" (インド象のように執念深い) といった言い回しがあります。こういったイディオム表現から判断する限り、ドイツ語において象は、決して良いイメージを付与されてはいません。

「蚊から象をつくる」(針小棒大、大げさな話をする) という言い回しにおいては、身体の巨大さだけが強調されています(右のカリカチュア: Badische Zeitung, 8. Dezember 1988)。象が厚い皮膚を持っている(Dickhäuter, Dickfelligkeit) ため、あらゆる批判にも動じない、つまり「鉄面皮」というネガティブなイメージが支配的です。実際にそのような政治的戯画も数多く描かれています(右のカリカチュア: Badische Zeitung, 11. Mai 1984)。日本の動物園では愛されている動物であり、人間的な感情を解する「象」いう、多くの日本人が抱いている象のイメージとはだいぶ異なっています。ディズニー映画『ダンボ』の影響も無視できないのではないかと考えます。

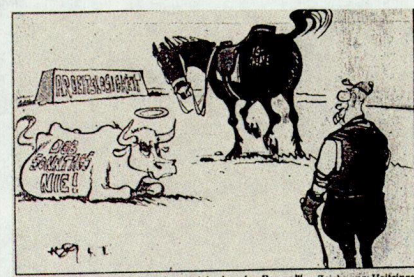


「蟻」についても日本とドイツには大きな差があります。ドイツ語においてはイディオム表現の構成要素としては登場



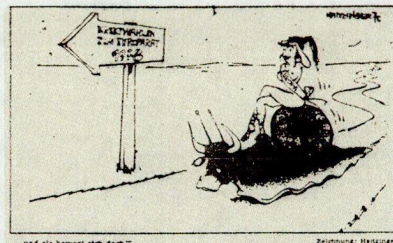
していません。日本語については『成語林』(尾上[監修]1992)には12の「蟻」を構成要素とする言い回しが収録されています。それらの言い回しを見る限り、蟻の身体の小さなこと、従って、その行為も取るにたりないということが中心的な意味をなしています。しかし、その小さなものが多数集まり(「蟻も軍勢」)、小さな行為が積み重なると大事業に至り得る(「蟻の塔を組む如し」ということでもあります。何よりも「蟻の歩み」という言い回しが多くの日本人にとっては、「蟻」の勤勉さを言い表しているものといえるでしょう。しかし、ドイツ語母語話者にとっては、勤勉さは蟻とも結びついていますが、より一般的にはミツバチの特性として連想されているようです。まさに、「bienenfleißig」(ミツバチのように勤勉な)という形容詞の存在がそのことを証しています。ドイツにおいても『イソップ物語』の中の「蟻とキリギリス」の話は、あまねく知られているにもかかわらず、です。

「牛」も、日独の間では、そのイメージに大きな差がある動物といえます。日本語の「牛(うし、ぎゅう)」を構成要素とするイディオム表現を見る限り、鈍重さが慣用的意味の中心をなしています。牛は、歩みは遅くても、確実に前進する忍耐強い動物として、プラス評価されています。菅原道真をまつる天満宮においては、道真公と並んで信仰の対象となっています(これは、隣接性、つまり換喩的な思考によるものでしょう)。これに対して、「blöde Kuh」(愚かな雌牛)という女性に対する罵り言葉に代表されるように、ドイツ語のイディオム表現における「牛」は、決していい意味を持ってはいません。「heilige Kuh」(神聖な牛)という言い回しがありますが、これはヒンドゥー教の見方をドイツ語に取り込んだものであり、ドイツ語本来の表現ではないといえます(右のカリカチュア: Badische Zeitung, 5./6. Januar 1989)。牛に対する日独のイメージの違いは、農耕作業において欠かせない貴重な労働力としての「牛」と、牧畜においてミルクを供給し、人間に利用されるだけの存在としての「牛」という捉え方の違いに



起因していると考えられます。

「牛歩」という表現も、のろいということを強調しているものであり、決して否定的な意味合いはなかったといえるのですが、日本においては政党間の国会における戦術として用いられたため、与党によって否定的な意味が付与されるようになってしまいました(右のカリカチュア: Badische Zeitung,

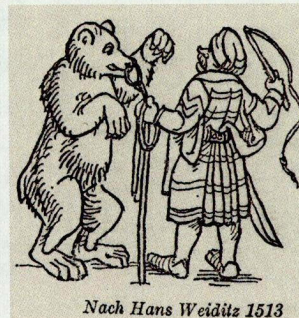


5. Juli 1978)。ドイツ語においても、「牛歩」という意味の "Ochsengang" という表現がありますが、これは、とりわけ役人(公務員)の「苦難に満ちた長い昇進の行程」という意味を持っています。

"jemanden an der Nase herumführen"は、"jemanden täuschen, irreführen" (人を欺く、過たせる) という意味になっていますが、本来は動物が対象でした(カリカチュア: Badische Zeitung, 22. Februar 1980)。日本語では「鼻面を引き回す」という言い回しに対応することになりますが、その場合「鼻面を引きずり回される」のは、おそらく牛であるといえるでしょう。しかし、ドイツ語の言い回しで引きずり回されるのは、本来はサーカスで曲芸を仕込まれたりする熊です。猿回しならぬ熊回しは、熊の鼻に鎖をつけて、村から村へと渡り歩いて、カスタネットの音に合わせて熊にダンスをさせていたということです(右の版画図: Dittrich 1975: 163)。



"Sieben auf einen Schlag" (一たたきで7つ) というのは、『グリム童話』「勇敢な仕立屋さん」に基づく言い回しです。実際に布きれで叩き落としたのは蠅だったのですが、「一発で7つ」(sieben auf einen Streich) とだけベルトに刺繍取りして、「蠅」という語は抜かしてふれ回ったので、ひとびとは一人で7人の人間をやっつけた勇敢な男だと誤解したので、その誤解から始まって、この仕立屋は、奸智と機転によって、最終的には王女様と結婚し、王になるという、出世物語です。普通は"zwei Fliegen mit einer Klappe schlagen" (2匹の蠅をたたき落とす) といいます。数を7にして"sieben Fliegen mit einer Klappe schlagen" といえば、ほらを吹くということにもなります。さらにイタリア語の対応する言い回しは"pigliare due colombi/prendere due piccioni con una fava" (一つの空豆で2羽の鳩を捕まえる) となります。空豆と鳩という組み合わせのほうが日本人にはよりなじみが深く、理解しやすいと思われます。「鳩に豆鉄砲」という言い回しもあるぐらいですから。しばしば使用例が見られる「一石二鳥」は、元々は"To kill two birds with one stone"というイギリスの諺に由来しているようです。より古いのは、中国語から持ち込まれた「一挙両得」ということのようにです(カリカチュア: Badische Zeitung, 22. Februar 1980)。

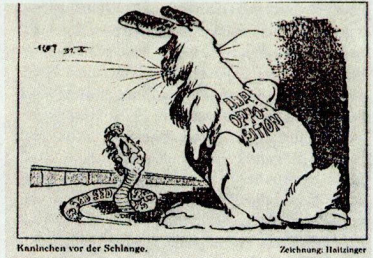


日本語には「蛇ににらまれた蛙」あるいは「猫に会った鼠」という言い回しがありますが、ドイツ語では「蛇と蛙」というペアではなく、「蛇と飼い兔」となって"wie das Kaninchen auf die Schlange starren" (身をすくめて蛇を見つめている飼い兔のよう) と表現します。兔が出た

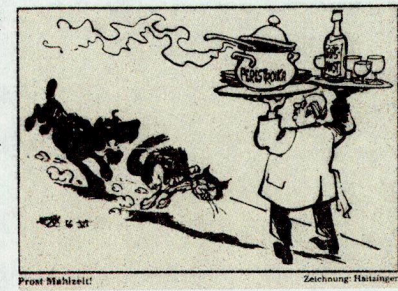


ついでにいいますと、日本語でいう「鼠算式に増える」は、ドイツ語では"sich vermehren wie die Kaninchen"（飼う兎のように増える）といひます。

日本語の「蛇」は、両義的であるといひます。「白蛇」はまれであるため、崇拜の対象ともなっています。他方、神話に登場する八岐大蛇（やまたのおろち）に見るように、人間にとって災厄をもたらす存在でもあるのです。伝説的には蛇は女性に姿を変え、執念深く復讐をねらうともされています。他方、ドイツ語の"Schlange"についてはどうでしょうか。"Schlange"という語から"giftig"（毒を持った）や"lang"（長い）が連想されることは、生物としての蛇の特徴であるといひます。しかし"hinterlistig"（下心がある、狡猾である）や"falsch"（偽りの）が連想されるというのは、旧約聖書に由来するといひえるでしょう。右のカリカチュア（Badische Zeitung, 27. Mai 1988）は、その旧約聖書のアダムとイヴの「楽園追放」をモチーフとしています。



日本語では非常に仲の悪い間柄を「犬猿の仲」といひますが、ドイツ語では"leben wie Hund und Katze" (Duden 1992: 440)と表現します。他の場所でも述べたことですが、日本のおとぎ話「桃太郎」では、犬、猿、雉が桃太郎のお供として、協力し合って、鬼を退治するという事になっています。仲の悪いものが、鬼を共通の相手として、連帯して戦っています。そしてドイツの『グリム童話』の中の「ブレーメンの音楽隊」では、馬、鶏、犬、猫が一致協力して、盗人の一味を脅して、家に乗っ取り、仲良く余生を過ごすという話です。ここでも仲の悪い犬と猫が連帯しているのです。「ブレーメンの音楽隊」では、リーダーがだれであるか明確ではありませんが、共通の対象に向かって仲の悪い者を連帯させるように導くということが、リーダーたるものの備えるべき資質だといひことを、これらの物語はかたっているとも理解できます。



「竜」のイメージも日独において差があります。多くの日本人がイメージする竜は、「蛇のような胴体を持ち、頭には二本の角、口には牙が生え、口元には長いひげがある...」（時田：634頁）。まさしくおどろおどろしい姿をしています。沼や池に住み、時に天に昇り、天翔ます。『大辞林』には、水をつかさどる竜神として、農業と結びつき雨乞い祈願の対象となり、漁師にも信仰された、という説明が載っています。日本の竜のイメージは、発祥はインドで、中国を経由して日本に渡来しているといひことでしょう。ドイツ語母語話者たちが抱いている竜のイメージは、日本人が抱いているもの（4頁の写真を参照）とは、異なっているようです。極端にいえば、大型のトカゲに羽が生えたという感じですが。政治的カリカチュアに描き出された竜を見る限り、そうなっている場合が多いようです。（右のカリカチュア：Badische Zeitung, 27. September 1984）。「竜」を意味する本来のドイツ語が"Lindwurm"であり、いわば「虫」となっていることとも関係があるのかもしれない。



日本では、「黒猫ヤマト」のヤマト運輸をはじめとして、動物をマスコットにしている運送会社が目につきます。カンガルー（西濃運輸）、ペリカン（日本通運）、ピューマ（トナミ運輸）、タイガー（山陽自動車運送）、象（松本引越センター）等、それらのマスコットは、迅速、丁寧、力強さ、というメッセージを伝えていると考えられます。パンダ（サ

カイ引越センター)、小熊(名鉄運輸)のように、かわいらしさ、親しみやすさを伝えようとしているマスコットもあります。運送会社以上に動物マスコットと結びついているのは、スポーツ、とりわけプロ野球チームでしょう。鯉(広島カープ)は、それほど強いイメージではありませんが、竜(中日ドラゴンズ)、虎(阪神タイガース)、鷲(楽天イーグルス)、鷹(ソフトバンク・ホークス)、ライオン(西部)、野牛(現在では球団合併によってなくなってしまった、近鉄バファローズ)等、力強さをメッセージとして伝えるものが多いようです。燕(ヤクルト・スワローズ)は、素早さでしょう。プロサッカー・チームでは、鹿(鹿島アントラーズ)しか思いつきませんが、足の速さを強調していると言えます。こういったマスコットは、いずれも日本人がそれらの動物に対して抱いているイメージを反映していると思われます。

「犬」や「牛」のように、ペットあるいは家畜として人間と生活を共にしてきている動物も多くいます。なじみとなった動物の外見、行動の特定の特徴が言語表現に取り込まれ、イディオム表現となっていると考えられます。実際の言語表現は、暗喩である場合もあるし(魚の目)、直喩である場合もあります(猫の鼠を伺うよう)。動物のどのような外見的特徴、どのような行動の特徴、あるいは人間にとっての有用性、有害性のいずれに焦点を合わせてとらえているかが、表現の意味内容を決めていると言えます。そして、その焦点の合わせ方は、言語によって、同じようである場合もあるし、異なっている場合もあります。それを明らかにしていくのが、異文化間研究の課題といえるでしょう。

文(Satz)

ことわざと慣用句の区別は、必ずしもいつでも明確とは言えませんが、ことわざは文として完結していて、生活に関する知恵や人生についての教訓を含んだものといえます。これに対して、上で見たように、慣用句は、まさに句であり、それだけでは文としては成立し得ず、文の一部としかなり得ないものです。ということで、文のレベルにおける発想の違いを見るための手がかりをことわざに求めることにしたいと思います。

日本語では「捕らぬ狸の皮算用」(確実に手中に収めていないものをあてにして計画を立てることのたとえ)(『成語林』805頁)といいますが、ドイツ語では"man soll das Fell nicht verkaufen, ehe man den Bären hat" (熊を手にしないうちに、皮を売ってはならない)と表現します。日本語では「狸」、ドイツ語では「熊」というわけです。

日本語には、(猫のそばに大好物の鰹節を置くことから)あやまちが起きる恐れのある状態をつくるたとえ)を「猫に鰹節」「猫に魚の番」という表現がありますが、同じ趣旨のことをドイツ語では"den Bock zum Gärtner machen" (雄山羊を庭師にする)といえます。いずれも不適切な役に付けるということです。和辻哲郎『風土』に依拠しているならば、日本語は漁業が背景にあり、ドイツ語は牧草を栽培する牧畜が背景にあるということになるのでしょうか。ついでながら、同趣旨のことを、デンマーク語では"sætte ræven til at vogte gaes" (鷲鳥を守ることを狐に任せる)(鈴木 2004: 63)といい、イタリア語では"dare le pecore in guardia al lupo" (羊を狼の監視下におく)といえます。それぞれの組み合わせの違いが興味深いと思います。

"nach dem rettenden Strohalm greifen" (救いのわらをつかむ)というドイツ語のイディ

オム表現には主語は明示されていませんが、日本でもよく使われる「溺れる者はわらをもつかむ」に対応しています。辞典によると、この表現は、本来は、英語のことわざ (A drowning man will catch a straw) を輸入したもののようです。ドイツ語の言い回しも、英語から持ち込まれたものと考えられます。ドイツ語の "Strohalm" に「藁」という日本語を対応させることは必ずしもまちがいではないのですが、ドイツ語で "Strohalm" といった場合、そこでイメージされているものは「麦藁」とするのが普通でしょう。地域差、個人差はあると思われませんが、日本人が一般にイメージするのは「稲藁」ではないでしょうか。本来の「麦藁」が、日本の農耕文化や地理的条件に起因して、「稲藁」と理解されているのです。(右上のカリカチュア: Buscha/Buscha 1988: 47)。



「鬼の居ぬ間に洗濯」という日本語のことわざに対応するドイツ語の表現は "wenn die Katze aus dem Haus ist, tanzen die Mäuse [auf dem Tisch]" (猫が家の中にいない時、テーブルの上で鼠が踊る) です。いずれも監督する者がいない時、息抜きをして、楽しむということです。



日本語では、「厚かましいくらいに他人の仕打ちに鈍感なこと」(『成語林』200頁)を、「蛙の面に水」あるいは「馬耳東風」といいますが、ドイツ語では "an jemandem ablaufen wie das Wasser am Entenflügel/am der Gans/am Pudel" (アヒルの羽に/鷺鳥/プードル犬/に水をかけて流すようなものだ) といえます。

プードル犬が出てきたついでにいいますと、日本語の「濡れ鼠のよう」に相当するドイツ語の表現は、"wie ein begossener Pudel" (水をかぶったプードル犬のよう) ですが、辞典の説明によると、ドイツ語の表現は、ずぶぬれになっているということだけでなく、みずぼらしい姿になっていることを恥じているという点が強調されているようです。イタリア語には "bagnato come un pulcino" (ひよこのようにずぶ濡れになって) という表現があります。

「権勢のあるものをかさに着て、勝手気ままにふるまうこと」を、日本語では中国由来の表現を使って「虎の威を借る狐」といいますが、ドイツ語では "der Esel in Löwenhaut" (ライオンの皮を着たロバ) というのが、それに対応します。日本語では「虎と狐」であり、ドイツ語ではイソップ物語に由来しているのですが、「ライオンとロバ」となっています。また「虎穴に入らば虎児を得ず」に対応するのは、"sich in die Höhle des Löwen wagen" (ライオンの穴にあえて入っていく) という表現です。この例から言えるのは、日本語の「虎」には、ドイツ語では「ライオン」が対応しているということです。しかし、日本には虎は生息していませんし、ドイツにもライオンは生息していません。それぞれ他の言語文化圏との交流によって、受け入れた表現だと考えられます。

「石の上にも三年」ということわざは、我慢強く辛抱することの大切さを諭しているのですが、ドイツ語では "steter Tropfen höhlt den Stein" (霤石を穿つ) という表現が、同じような意味で使われています。日本語でも「霤石を穿つ」といいますが、日本語のこの表現は、中国から来たもののようです(『成語林』41頁)。ドイツ語の表現は、ローマの文学に由来しているもののようです (Duden 1992: 736)。洋の東西を問わず、同じ現象に同じ教訓を見いだしている例と言えるでしょう。

文章(text)

文章は、あるひとまとまりの考えを述べたものですが、思考にまとまりを持たせるため

に、ある一つの比喩に依拠して考えを展開させるということがしばしばあります。例えば、「現実に流されないための錨」というのは、ある著書の一つの章の表題ですが、この表現の裏には、人生＝航海（船旅）と捉える比喩があります。当該の章の1節は、そのことをもっと明確にしているのですが、「荒波に流されないための錨」という見出しが付いています。当該節の前の「ある友人の就職」と題されている節と、当該節の一部分を次に引用します（引用に当たって、全体の趣旨を変えない範囲で、原文の一部を省略し、改行等に変更を加えました）。

（略）一九七四年の春のことです。私が大学の卒業を迎えようとしていた時期でした。そのころ、ある友人と交わした会話が、いまもここに残っています。それは、卒業後の就職先についての会話でした。（略）... 私は、彼から就職先として選んだ高校の名前を聞いて、内心、驚きました。

（略）... 彼が選んだのは、... 落第、退学、非行、校内暴力、そうした問題が、しばしば眉をひそめて語られる高校だったのです。（略）... 私は、思わず、彼に聞いたのです。「君も、あの高校の悪い評判は聞いているだろう。それなのに、なぜ君は、あの学校を選んだのかい」そのときの彼の答えが、いまも忘れられません。彼は、決して気負うことのない静かな口調で、こう答えたのです。「たしかにあの学校は、非行や校内暴力が問題になっている高校だよ ...。だけど、そうした学校にこそ、本当の教育が必要なのではないだろうか ...」その友人の、その言葉を聞いて、私は深く考えさせられました。なぜ我々は働くのか。そのことを考えさせられたのです。（略）その彼の言葉は、「なぜ我々は働くのか」という問いに対する、彼なりの答えを明確に表明したものでした。それは、おそらくは、「仕事の思想」とでも呼ぶべき、明確な「何か」だったのです。（略）彼とても、これから一艘の小舟で漕ぎ出さんとする実社会という海原の、荒波の厳しさも潮流の激しさもわかっていたはずです。そして、それがわかっていたからこそ、その現実の荒波や潮流に流されてしまわないようにするための「錨」を求めたのでしょうか。いかに厳しい荒波がやってこようとも、どれほど激しい潮流がやってこようとも、決して流されてしまわないために、「仕事の思想」という重い「錨」を、こころの深くに降ろそうとしたのでしょうか。（田坂広志『仕事の思想』PHP文庫、22-29頁）

個々人は船を操って人生という海原、荒海を航海していく、いわば小舟の船長さんであると捉えているのです。この文章を支えている比喩がどのようなものであるかを理解すれば、そこでたぐり出される船、航海に関する表現のすべてがつながりをもってきます。そしてまた、この文章では出現してこない航海に関するさらに多くの表現を手がかりにして、思考を展開することができるのです。

文章ではありませんが、ドイツ語の"Lebensgefährte/-gefährtin"（人生の伴侶）という語に含まれている"Gefährte/Gefährtin"は、元々"jemand, der auf der gleichen Fahrt ist"（旅をともにしている者）（Kluge 1989: 250）という意味ですから、ドイツ語も人生を旅であるとも捉えているといえます。人生を旅、登山、マラソン等、長い行程の歩みにたとえるのは、言語を問わず普遍的ともいえるのかもしれない。

次はドイツの新聞のコラム記事ですが、この文章の後半部分では、「政治＝料理」という比喩が論の流れを決定しているといえます²⁾。

Öl ins Feuer

af. Wenn die Diskussion über die polnische Westgrenze in diesem Stil weitergeführt und womöglich zum Wahlschlager des Jahres 1990 wird, dann läßt sich nur sagen: Gute Nacht, Deutschland. Begreift denn keiner von denen, die ihre akrobatischen Kunststücke zwischen dem "Fortbestehen des Deutschen Reiches in den Grenzen von 1937" und beruhigenden Zusagen an die Polen aufführen, wie sehr sie damit der Idee der deutschen Einheit entgegenarbeiten? Glaubt denn wirklich jemand, es werde je eine gesamtdeutsche Konföderation oder Föderation geben, wenn nicht zuvor ganz glasklar festgelegt wäre, daß

an der bestehenden polnischen Grenze nicht gerüttelt wird? Helmut Kohl, der diese Diskussion für "unnötig" hält, weiß selbst am besten, welcher Schaden für die deutsche Sache dadurch entsteht, daß diese letzte Klarheit bewußt unterbleibt. Bundestagspräsidentin Süssmuth hat diesen Zusammenhang ohne Scheu angesprochen. Wenn es wirklich der Wille der Bundesrepublik und der DDR ist, die bestehende polnische Grenze zu garantieren, dann steht überhaupt nichts im Wege, dies auch in einer gemeinsamen Erklärung festzustellen. Statt dessen betreibt der Präsident des Verfassungsgerichts völkerrechtliche Glasperlenspiele um das Seminarthema, ob sich die Wiedervereinigung unbedingt in den Grenzen von 1937 vollziehen müsse. Schon greifen Vertriebenenfunktionäre solche Stichworte begierig auf und denunzieren Rita Süssmuth als "Totengräber Ostdeutschlands". Merkt denn keiner, wie das Öl in ein Feuer gegossen wird, das durch pure Fahrlässigkeit entzündet wurde? Hier die Hände in den Schoß zu legen, läuft auf die Einladung hinaus, auf diesem Feuer parteipolitische Suppen zu kochen. (Badische Zeitung, 2. Januar 1990, Tagesspiegel)

(火に油)

af. ポーランド (とドイツ) の国境に関する議論がこのようなやり方でさらに続けられ、1990 年に行われる選挙のスローガンになりでもしたら、次のようにいうしかない: お休みなさい、ドイツよ。アクロバットの的に「1937 年の国境線におけるドイツ帝国の存続」といったり、「ポーランドをなだめすかす発言」をしたりする者は、ドイツ統一という理念の実現を妨げるだけであることを、誰もわかっていないように思われる。ポーランドの現在の国境が根底から変わることはない、ということが完全に確定されずして、全ドイツ連盟、あるいは全ドイツ連邦があり得るなどと、本当にそう信じているのかどうかと問いたい。ヘルムート・コール (ドイツ首相) はそのような議論は「無用なもの」と考えているが、彼自身重々知っていると思われるが、このことが意識的に明らかにされないままであることによって、ドイツ統一という案件にとってどのような損失が生じるか計り知れない。連邦議会議長のズースムートは、尻込みすることなく、そのことに言及した。もしも本当に連邦共和国と DDR がポーランドの現在の国境を保証するつもりであるならば、そのことを共同宣言において確定することに、そもそもいかなる障害もないのだ、と。そうせずに、憲法裁判所長官が行っているのは、民族主権を危うくする危険な行為であり、再統一は無条件に 1937 年の国境線において実現されなければならないのかどうか、という、決着済みの演習テーマを蒸し返しているだけである。すでに引き揚げ者同盟の幹部たちは、喉から手が出るほどほしがっていたそういったことばを取り上げ、リータ・ズースムートを「東側ドイツの墓堀人」といって非難している。明らかに思慮に欠けた言葉遣いによって、火に油を注ぐ結果になるということに、誰一人として気づく者がいないのだろうか? ここで事態を座視するということは、政党間の利害抗争に引き込まれていく結果になるだけであろう。

おわりに

ドイツの方言研究者 W・フィーレック (ドイツ、バンベルク大学教授) は、ある論文の中で次のようなことを述べています。

「... 木イチゴという名を与えている性質は、とりわけ、そのイチゴの色 (たとえば、英語 Blackberry 等) であつたり、その植物が持っている小さなとげ (たとえばイタリア語 *mora di spina*) であつたり、果実の形 (例えばロシア語 *kamy*) であつたり、茂みの形 (たとえばスウェーデン語 *snärebär*) であつたり、似た外観の動物 (例えばスラブ語 *éz* (ハリネズミ)) であつたり、あるいは当の植物が生えている場所 (例えば「野」や「水」「川岸」

や「森」)であったりする。」

しかし、フィーレック教授は、教授が追究しているテーマとの関連では、「多様な動機付けに基づいて事物が命名されているが、本論の連関においては、もちろん、それらのすべてが意味あるものではない。」「こういった動機はすべて本論文が関与するものではない。」として、さらに次のように述べています。

「ここでもっと重要なのは、あとで示されるように、木イチゴの場合についていうと明らかにそれほど多いとは言えない命名だが、例えばスウェーデン語の *käringbär* (魔女の苺) や *salomonbär* (ソロモンの苺)、あるいはポーランド語の *dziad* (おじいさん) といった名前である。」(Viereck 2003: 120)

フィーレック教授は、ヨーロッパ諸国の同じ事物に対する方言の名前の比較にもとづいて、それらが、人類の文化の展開の歴史を反映しているものであるとしています。命名のあり方を全ヨーロッパ的に検討してみると、宗教的な枠組みによる命名、超自然的・超人間的な命名、動物に似せた命名・親族関係に基づく命名という3つの層が見て取れるとしています。それらの層が、命名の動機付けに大きく与っていると考えています。事物の認識のあり方、そして命名の動機付けの枠組みを決定しているというのです。

本ゼミナールで取り扱った材料に即して言えば、「日の出」「日の入り」が擬人的な命名と言うことになるでしょう。そして、「虎の尾」「龍の髭」「竜舌蘭」等が、動物に似せた命名と言うこととなります。「入道雲」「彼岸花」「釣鐘草」「菩提樹」等は、明らかに仏教的な命名です。この連関で、興味深いのは、おそらく中国語から持ち込まれた「虹」以前に日本語に存在した「雨の浮き橋」といった命名です。それは、中国語の発想以前の、古代日本語、そして古代日本人の発想を示すものとも考えることも可能だからです。

ケヴェチェス/サボー (Kövecses/Szabó 1996) は、イディオム表現の意味理解は、概念的暗喩、概念的換喩、慣習的知識の3つに基づいているとしています。たとえば "He was spitting fire" (彼は激怒していた) 中の "spit fire" というイディオム表現は、"ANGER IS FIRE" (怒りは火) という概念的暗喩に基づいて理解されています。"fire" に関する概念的暗喩は、さらに、"LOVE IS FIRE" (愛は炎)、"CONFLICT IS FIRE" (紛争は火) 等、種々のものがあり得えます。概念的換喩とは、"a factory hand" (=a factory worker) (工員) という表現の意味理解を支えるものであり、"THE HAND STANDS FOR THE PERSON" という表現形式を取ります。「猫の手も借りたいほど忙しい」という日本語の言い回しの理解にもそのような概念的換喩が関与しています。"handful" が、なぜ "a small number" という意味になるのか。ここには日常的な慣習的知識が関与しています。手一杯といっても、たとえば、リンゴはせいぜい数個しかもてません。手押し車で運ぶ場合と比較すると、少数ということになります。

比喩的な理解は、ある領域の事物(比喩の適用対象)を、それとは別のよく知られた領域の事物(比喩の提供者)になぞらえて理解するというものですが、ケヴェチェス/サボーの説をフィーレックの構想と考え合わせるならば、次のようなことになるでしょう。わたしたちが比喩的な理解をおこなう時、その比喩の提供先が、大きくいって、フィーレック教授がいう、命名の動機付けの3つの層によって規定されている場合が多いということになるでしょう。

本ゼミナールでは、フィーレック教授の大規模な調査研究とは全然比較になりませんが、日本語、英語、ドイツ語、イタリア語における方言ではなく、それぞれの言語における共通語というという限定をした上でのことであっても、それらの言語における表現を比較してみると、それぞれの言語表現の背後にある発想、比喩的な捉え方、認識の枠組みの違いが見て取れると言うことを示したつもりです。

それぞれの言語においては、焦点が合わされている特性には違いがあります。そのよう

な違いを認識すること、発想の多様性を知ることにも、異言語を学習することの意味はあるといえます。ある外国語をある程度マスターして駆使できるようになると、つい忘れてしまっている初心、驚きを今一度想起することが、外国語学習をいつまでも興味深く続けていける動因となるでしょう。以上のようなことが、本ゼミナールを通して、言いたかったことです。

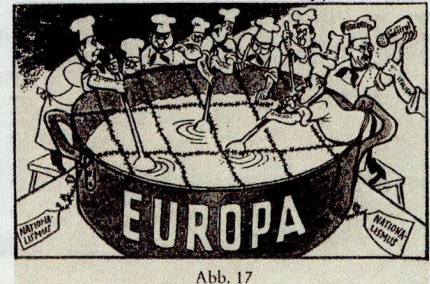
注 釈

1) 本論考は、2005年7月16日に行われた「平成17年度ゼミナール入試」の一環としておこなった「高校生のための言語学入門—虹の彼方に見える言語文化論—」と題する講義原稿を部分的に書き改めたものである。「はじめに」において、人類の誕生、言語の誕生、言語の起源、命名の観点について概説したのは、聴講者として高校生を想定しているためである。「本講義」、「本ゼミナール」という表現が見られるのも、そのためである。同様の考えから、本来は注釈すべき事項についても、可能な限り本文中に取り込んで論述をおこなった。本論考では、従って、注釈はほとんど付されていない。本誌『かいろす』42号掲載の拙論「日独イディオム比較・対照—動物名を構成要素とするイディオム表現—」と、本論考の「句」に関する論述は、大部分が重なっていることを断っておく。

本論考のドイツ語版 "JENSEITS DES REGENBOGENS - Bemerkungen zur Benennungsmotivation oder zum metaphorischen Bild vom Gesichtspunkt der deutsch-japanischen kontrastiven Untersuchungen - "が、ドイツ連邦共和国バンベルク大学ウォルフガング・フィーレック教授 (Prof. Dr. Wolfgang Viereck) のための記念論文集に掲載される予定である。

なお、本論考は、科学研究費補助 (基盤研究 (B)、研究課題「グローバル時代における教職教養のモデル構築のための日欧国際比較研究」、課題番号: 17402040、研究代表者: 樋口聡) による研究成果の一部である。

2) 右ののカリカチュア (Röhrich 1969: 184) は、"Politik ist Kochen" (政治は料理) という概念的暗喩に基づいて、ヨーロッパの状況を捉えたものといえる。直接的には、"Viele Köche verderben die Suppe" (多くの料理人はスープを駄目にする) ということわざ的言い回しが、このカリカチュアのモチーフとなっている。」



参考文献

- Alinei, Mario 1983:** Arc-en-ciel. In: Atlas Linguarum Europae. Vol.I.1 - Commentaires. Premier Fascicule. Assen: Von Gorcum, 47-80.
- Alinei, Mario 1991:** New hypotheses on the linguistic origins of Europe: the contribution of semantics and dialectology. In: QUADERNI DI SEMANTICA, 12/2, 187-203.
- Dittrich, Hans 1975:** *Redensarten auf der Goldwaage*. Bonn: Ferd. Dümmlers Verlag.
- Drosdowski/Scholze-Stubenrecht (Hrsg.) 1992:** Drosdowski, Günther /Scholze- Stubenrecht, Werner (Hrsg.), *DUDEN 11. Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Wörterbuch der deutschen Idiomatik*. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Földes, Csaba 1990:** Phraseologie und Landeskunde - am Material des Deutschen und Ungarischen. In: *Zielsprache Deutsch, H.2*; 11-15.
- Földes, Csaba 2003:** *Interkulturelle Linguistik*. Wien: Edition Praesens.
- Földes Csaba (Hrsg.) 2004:** *Res humanae proverbiorum et sententiarum*. Ad honorem Wolfgang Mieder. Tübingen: Gunter Narr Verlag.

- Harras, Gisela/Haß, Ulrike/Strauß, Gerhard 1991:** *Wortbedeutungen und ihre Darstellung im Wörterbuch*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Heringer, Hans Jürgen 2004:** *Interkulturelle Kommunikation*. Tübingen/Basel: A. Francke Verlag. (UTB 2550)
- HDA 1935/1936:** HANDWÖRTERBUCH DES DEUTSCHEN ABERGLAUBENS. Herausgegeben unter besonderer Mitwirkung von E. Hoffmann-Krayer und Mitarbeit zahlreicher Fachgenossen von Hanns Bächtold-Stäubli. Band VII. Berlin/Leipzig: Walter de Gruyter & Co, Spalte 586-597 (Regenbogen).
- Kluge, Friedrich 1989:** *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Kövecses, Zoltan/Szabó, Péter 1996: Idioms: A View from Cognitive Semantics.** In: *Applied Linguistics*, Vol. 17, No.3, 326-355.
- Lakoff, George/Johnson, Mark 1980:** *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (G・レイコフ/M・ジョンソン『レトリックと人生』(渡辺昇一/楠瀬淳三/下谷和幸訳)、大修館書店)
- Meda, Tomiyoshi (Hrsg.) 2005:** Nihongogenndaijiten (前田富祺監修『日本語源大辞典』、小学館)
- Ogami, Kanehide (Hrsg.) 1992:** *Seigorin*. Tokio: Obunsha. (尾上兼英 [監修]『成語林』、旺文社)
- Röhrich, Lutz 1991/92:** *Das große Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten*. Freiburg/Basel/Wien: Herder Verlag.
- Seto, Kenichi:** *Metaphorischs Denken*. Tokio: Kodansha. (瀬戸賢一『メタファー思考』、講談社現代新書)
- Strauß, Gerhard 1991:** Metaphern - Vorüberlegungen zu ihrer lexikographischen Darstellung. In: Harras, Gisela/Haß, Ulrike/Strauß, Gerhard 1991, 125-211.
- Suzuki, Masako 2004:** Über die Relation zwischen Formfestigkeit von Sprichwörtern und Idiomen - an Beispielen aus dem Dänischen-. In: IDUN (The Division of Danish and Swedish, Osaka University of Foreign Studies), Osaka, 55-74.
- Ueda, Yasunari 2004:** Kontrastive Phraseologie -idiomatische Wendungen mit Tierbezeichnungen als Hauptkomponenten im Deutschen und Japanischen. In: Földes, Csaba (Hrsg.) 2004, 351-364.
- Viereck, Wolfgang 2003:** Der *Atlas Linguarum Europae* und seine Einsichten in die Kulturgeschichte Europas". In: *Historicni seminar 4. Zbornik predavanj 2001-2003*. Ljubljana: ZRC SAZU, Založba, ZRC, 119-130.
- Viereck, Wolfgang 2004:** Chasing Butterflyies: Why is a Butterfly called Butterfly? (Vortrag, gehalten am 16. November 2004 an der Universität Hiroshima/JAPAN)
- Wierlacher, Alois 2000:** Interkulturalität. Zur Konzeptualisierung eines Rahmenbegriffs interkultureller Kommunikation aus der Sicht Interkultureller Germanistik. In: *Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache* 26, 263-287.

ドイツ語レジュメ

Zusammenfassung auf Deutsch

Das Ziel der vorliegenden Arbeit besteht darin, Benennungsmotivationen oder Bilder, die den deutschen und japanischen Ausdrücken zugrundeliegen, deutsch-japanisch kontrastiv herauszuarbeiten, um dadurch interkulturelle Aspekte bewusst zu machen. Dabei werden Ausdrücke auf der Ebene der sprachlichen Einheit des Simplex, des Kompositums, der Phrase, des Satzes und des Textes als Vergleichsbeispiele aus den beiden Sprachen herangezogen. Beispiele aus anderen Sprachen (Englisch, Italienisch, Dänisch u. a.) werden auch mancherorts berücksichtigt. Auf diese Weise will die vorliegende Arbeit einen Beitrag zur interkulturellen Verständigung und zur Diskussion über die Methodik in interkulturellen Forschungen leisten. Darüberhinaus wird die Universalität der metaphorischen Auffassungsweise in der menschlichen Sprache und die Plausibilität des Dreischichtenmodells, das sich auf die Beobachtungen der Benennungsmotivationen in verschiedenen europäischen Dialekten stützt (Alinei 1991, Viereck 2003), untermauert.